

昭和46年7月1日 第1種郵便物認可
平成19年10月1日発行 毎月1回 10頁
俳句雑誌 沖 第55巻第10号

俳句雑誌「おき」

沖

10
月号

沖
發行所

鉤 穴

能村 研三

代表句をもとに

夏 惜 し む 大 江 戸 線 の 深 度 か な

馴 染 み よ き 握 り び か り の 避 暑 鞆

秋 灯 や 書 架 に 置 か れ し 護 符 二 つ

う ま ぶ き と 云 ふ 古 き 名 の 牛 蒡 掘 る

昨年(一九三〇年)の十二月号に「この一年・沖同人自選の一句」と題して、各同人が一年に作った作品の中から、一番自信のある句を自選してもらったことにした。本年も、引き続き同人に一句を出してもらったことになっている。俳句を作っているからには、だれもがせめて一句ぐらいは仲間たちが自分の句を諸んじてくれるようにしたいもの。名前と共に「この人と言え、この句がある」と印象づける句がほしいのである。

たとえば、中村草田男ならば「万緑の中や吾子の菌生えそむる」、石田波郷ならば「吹き起る秋風鶴を歩ましむ」のような句であれば、誰もがすぐに口ずさむことができる。沖人なら、先師登四郎や林翔先生の句を数多く暗誦していると思う。

八月の終りの頃になると、各俳句総合誌から「年鑑」に掲載される、一年間の代表作品五句の依頼がくる。「一年間「沖」に掲載した作品百二十句と総合誌に発表した作品を合わせた中から改めて自選するわけだが、やはり句会で評判がよかった句や、雑誌で批評を受けた句が記憶に残っていて、その中から選ぶことが多い。

厄日来て糊効きすぎし釘穴

秋の夜の屈み抱へのチェロ奏者

芋煮会マイク音量割れてをり

一つとは限らぬ答夜の長き

普請場の超高層に秋澄めり

飴色の定規狂はず秋ともし

やがて句集を編んだ時に、その句がどのような評価を受けるか不安な面もあるのだが。

いずれにせよ、十二月になると「沖」では、同人の代表句一句が、俳句総合誌の「年鑑」では、多くの俳人の年間代表句がそれぞれ発表されるので、これをつぶさに読むことも大きな勉強になり、今の時代の俳句の流れを掴むことができる。

それと「沖作品」の投句者も、一年間に発表し入選した作品の中から今年の代表句一句を自選してみることも必要であると思う。

能村 研三



小粒秋色

林 翔

駒込大観音

九月一日（土） 平熱だったので中央例会に出席。句会後の小宴は失敬して帰宅。

九月二日（日） 微熱あり、休養することにして寝室で過ごす。寝台の右にはテレビ、左にはラヂオとCDプレーヤーがあるが、ついテレビの方を見てしまう。午後二時からのNHKテレビで「につぼん・心の仏像」を観ている内に、幼少の頃に親しんだ駒込大観音を思い出した。

初風にそよがぬ葉あり老いの色
秋雨は眼に沁む雨や森を背に
秋_こ 微_さ 雨_め 喪 服 の 人 の 傘 紅 き
巨虫死せり甲羅に秋色漂はせ

駒込大観音は団子坂を昇って本郷肴町に出る大通りの右側に在った。幼少の頃は広い境内で遊ぶ方が目的だが、勿論、遊ぶ前に大仏様を見上げて掌を合やすことは欠かさなかった。年に一度の御縁日には胎内潜りも許されていた。縁日には露店も沢山出たが、七月上旬、蛍の季節である。蛍籠を露天商から買って帰るのも楽しみであった。家に帰って蛍籠を縁先に吊し、夜になると蚊帳の中

曙光を小粒に受けて赤のまま

夕日得し水引草を羨しとも

ふと仰ぐ空の狭しや酸漿市

コスモスも少女も首を傾げけり

蝗より蝗捕る児のよく跳ねる

「新型爆弾」とラヂオは告げつ広島忌

回想、昭和二十年八月六日

に虫を放って楽しむのであった。

あの頃、子供の服装は殆どが着物であった。男の児は、夏は白緋、それ以外は紺の着物である。学校に行く時は、それに行燈袴を穿いて通学したのだが、一度、遠足地で田舎の小学生を見たら着物だけで袴も穿いていないのに驚いた記憶がある。

私が通学していた本郷区（現、文京区）千駄木小学校でも、クラスで洋服の児は、社長の令息と画家の令息の二人だけで、他は着物に行燈袴であった。

さて、駒込大観音は戦災で焼失してしまった。私の家が焼けたのと同じ、昭和二十年三月十日である。

林 翔



蒼茫集



晩夏

菅谷たけし

船宿の裏の潮退く晩夏かな
畳屋の土間の掃かれて盆休
幅二間くらやみ坂も真炎天
問答河岸触るものみな灼けてぬし
蟻地獄空気ひんやりしてをりぬ
補聴器のひろふさざめき夜の秋

子午線

秋葉雅治

異次元かも知れぬ茅の輪の向う側
竿灯の最上段は風の御座
子午線の北に傾き涼新た
素風背品川宿にこれより五十三の宿
草市も路地も濡れいろ神楽坂
熾熾る炎より残る火美しき大文字

泉湧く

大畑善昭

みちをしへ径の岐るるところまで
泉湧く砂の小躍り休みなく
山中に見し一瀑の目を去らず
梅を干しおき産院へ赤子見に
浴衣着の笑み初産の一子挙げ
にいにい蟬赤子は切に眠たくて

鮑屑

北川英子

田水沸く道ひたに急く父母の墓
ドロ―てふ試合もあるぞ兜虫
今朝秋の鏡の中に乾びぬし
新涼の紙より薄き鮑屑
アンカーに炎天の坂もう一つ
祖国いとし国家いかめし八月来

一文字 中尾杏子

死神の裳裾が触るるあやめ草
麻酔覚めこの世の薔薇のかく紅し
まろかりし乳房はいづこ明易し
患者らにシャワー順番星月夜
空蟬のくだくる音よながさき忌
羅や乳房の創は一文字

強面 上谷昌憲

強面の器用に桃を剥き呉れし
できるだけ桃に触らず桃を剥く
滝壺に森の引力殺到す
向日葵やみんな一人称主格
ナイターのウェーブにのる迂闊かな

水を打つ 小山田子鬼

水打つや活断層の上に棲み
滴りの間遠のかなた少年期

またの世も黙し通すか烏頭
昼の酒素直にまはる祭り前
酔ふままに水辺さまよふ午睡かな
老い先の未だ描けず天の川
鯨 尺 辻 直美

行く水と来る水のおひ夕河鹿
滴れる梨剥く父祖の地を讃へ
ちちははの夜なべや曲尺鯨尺
灼くる日やか焼跡のトタン板
力点を平らに均し昼寝せる
終日を降りみ降らずみ蚊遣香
耳二つ 千田百里

かたつむり一度は跳んでみたからう
打水の秀に飛びつきし乾び土
遠花火木の股といふ座を得たり
舟だまり灼けゐて突然の睡魔
秋暑し品川富士の鉄鎖攀ぢ
秋の暮相寄らざりし耳二つ

潮鳴集

夏の月

伊藤真代

代果てしさら地にそよぐねこじやらし

二夫送りなほある余生夏の月

暑さ言ふ口に止めをさされけり

大西瓜仏も加へ切る真昼

水鉄砲瘦せつぼつちの兄貴ぶり

一行詩

頓所友枝

雲湧いて姿整ふ夏景色

蟬鳴くや眠れぬ夜の一行詩

病窓の四面彩る花火かな

秋暑し衝動買ひの半値市

海原にわたしの涙加へ秋

荒物屋

高木嘉久

問診の途切れ香水ほのかなり

ゼラニウムゴジラ上陸地点とか

日除深くし荒物屋残りけり

三河屋も美濃屋も失せし帰省かな

ラジオには昭和の時報終戦日

日のかげら

栗原公子

涼しかり星座は花の名をもたず

忘るとは涼しかりけり淋しかり

白樺の日のかけら降るハンモック

決断のまだ揺れてゐる凌霄花

青みかん奮ひ立たせる気の弱り



沖作品



能村研三 選

帰省子に山河淋しくなるばかり

神奈川

堀口 希望

沼底に河童隠るる大暑かな
角帽も青春の日も曝しけり
廃船の鉄錆匂ふ晩夏かな
袈裟がけに昆布負ひきて昆布干す

北海道

梶川智恵子

海に出て夏蝶ひとひら帆に紛る
父祖よりの海の息づく烏賊釣火
手花火やふる里の闇膝囲ひ
山の風村に治まり蕎麦の花
ゴーギャンの土の色して夏の果
新涼の画鋏でとむる落し物
日雷指揮者の背の伸び縮み
朝涼のピーマンおびえてゐるかたち
夕焼をもつとも遠き空と思ふ

東京

小嶋 洋子

八月のタイルを滑りゆく石鹼

千葉

篠藤千佳子

曖昧に癒されてゐる海月かな
あの頃の顔となりたる夏帽子
冷房の止まりてよりの本音かな
究めたきことのありけり滝落つる
真つ直ぐは傷つきやすしグラジオラス
やはらかく身に添ふ形身藍ゆかた
朝顔市土に還るといふ鉢で
鯉食べて降りこめられてゐたりけり
夏然としたたる母郷地震走る
夏深しコントラバスは地のひびき

茨城

内山 花葉

婚約も告げ白シャツの調律師
籐寝椅子胎児に聴かす子守うた
紺碧に白のふくらむヨットの帆
小舟漕ぐピアスの男晩夏光

神奈川

大森 春子

沖作品 15句選評

*
能村研三

廢船の鉄錆匂ふ晩夏かな 堀口 希望

鉄を詠んだ句でよく思い出すのは、山H誓子の「夏の河赤き鉄錆のはし浸る」という句である。当時は、俳句に「鉄」を詠むこと自体画期的なことで新しい試みとして評価された。堀口さんの句も、「廢船」というマイナーな素材を句に取り込みながら、「朽ちてゆく美」「滅びゆく美」とでも言うのか、「廢船」に何か夏の終りの哀愁を感じさせる。甲板を縁取る手摺りには鉄錆のつららができ不気味でさえある。海を渡る潮風に鉄の錆びた匂いが混じり、長年航行してきた一隻の船をいとおしむ氣持が湧いてきた。

袈裟がけに昆布負ひきて昆布下す 梶川智恵子

梶川さんは北海道の方であるから、日高昆布など昆布採りの現場を實際目にして作られた句なのだろう。昆布採りの作業は大変重労働のようで、かき悼ですくいあげながら岩礁にがつし

りと着生している昆布をはずす。そしてはずれたらすぐに船に引き上げる。昆布を採るには、勘と技術と力があるという。梶川さんの句は採った昆布を次々に干していく作業をつぶさに写生しており、リアルに描写された句は読者をひきつける力を持っている。

朝涼のピーマンおびえてゐるかたち 小嶋 洋子

ピーマンというと子供心に最も嫌いな野菜というイメージがあった。昔は独特の香りが強いいため、敬遠する人も少なくなかったが、その後食べやすい品種の開発がすすめられ、くせが少なくなつたといわれている。そんなことがこの句の伏線にあるのかも知れない。ピーマンのあの何か歪なかたちは怯えているからだと考えるのも面白い見方である。台所で調理をする土主婦ならではの句である。

八月のタイルを滑りゆく石鹼 篠藤千佳子

この句から何か必要以LILの意味を求めてはいけなないのかも知れない。「八月」というと、一年の中で最も暑い季節で、盆踊りや花火大会もあるが、ここではやはり、原爆投下のあつた八月の六日、九日、そして敗戦記念の十五日といった日本の傷みをイメージとして捉える月と考える方がよいのかも知れない。風呂場で手から離れてタイルを滑ってゆく石鹼にイメージを膨らませた句である。

(以下略)